

栽培の要点（共通事項）

1. 堆肥、珪酸資材、稲わら等の施用により、地力の維持・増強を図る。
2. 品種の優点・欠点を把握し、栽培上の注意事項を厳守する。
3. 種子消毒の励行と育苗期間の温度管理に留意し、健苗を育成する。
4. 施肥時期、施肥量の適正化に努める。
5. 防除組織の育成・強化と病害虫の「早期発見・適期防除」を骨子とする、病害虫防除指針・除草剤使用指針に基づく農薬の計画的な「安全かつ適正な使用」に努める。
6. 除草剤の安全かつ効果的使用方法を徹底する。
7. 水管理の適正化を図り、特に収穫前の早期落水を避ける。
8. 適期刈り取りの励行、脱穀、乾燥、調製の適正化により米の品質向上を図る。

II 機械移植栽培標準体系

1. 早期稚苗移植栽培耕種基準

(1) コシヒカリ・よさ恋美人

項目	要点	実 施 内 容
1. 育 苗 (1) 床土準備	病害の恐れのない土を選ぶ	(1) 砂土、粘質土、蛇紋岩風化土壌以外の病害の恐れのないpH5.0～5.5の土を乾燥し、3～4mm目の篩でとoshi、10a当たり60～70l準備する。 (2) 床土と覆土を別々に準備する場合は、床土用の篩は6mm目程度でよい。 (3) 床土のpHが高いと、苗の生育が劣ったりムレ苗などの苗立枯症状の発生が多くなるので、床土のpHを調整する必要がある。 (4) 病菌に汚染されている恐れのある床土は使用しない。
(2) 施 肥	混合ムラにならないよう均一にまぜる 苗立枯病を防止する	(1) 床土量は、1箱当たり30程度で、これに硫安6g、過石6g、塩加3gをできるだけ均一に混合する。肥料を多施用すると、軟弱徒長し、苗質が劣化する。 播種前に床土に薬剤を混和する。使用については県病害虫防除指針に準じる。
(3) 種子予措 1) 選 種	充実の良い種子を確保する	10 a 当たり必要種子量は乾燥籾で3.0～4.0kgである。 充実の良い種子を確保するため塩水選を必ず行う。塩水選比重は1.06（水10lに食塩85g）程度とする。使用する籾（沈んだ籾）はよく水洗後、乾かす。
2) 種子消毒	種籾の消毒は必ず行う。	種籾には、前年発生したばか苗病、いもち病、ごま葉枯病などの病原菌が付着しているため、健苗育成のためには種籾の消毒は必ず行わなければならない。なお、種子消毒の使用薬剤と対象病害虫、使用方法については県病害虫防除基準を参考にすること。 ※薬液量は種子重量の2倍以上とし、使用した農薬廃液は適正処理を行う。 温湯消毒を行う場合の温度、浸漬時間は、60℃、10分を目安とする。

項目	要点	実施内容
3) 浸種		<p>(1) 発芽には、積算温度で100℃以上が必要。浸種期間は10日間、水温は15℃程度を必ず確保する。 水温確保のため、屋外での浸種はしない。</p> <p>(2) 粃は網袋に8分目までとする。</p> <p>(3) 水量は種子重量の2倍以上とし、水を循環させるか、2～3日に1度水を入れ替える。</p>
4) 催芽	催芽ムラのないよう注意する	<p>(1) 催芽温度は30℃程度を確保する。</p> <p>(2) 短期間にできるだけ均一に発芽、生育させるため、十分に吸水させて1mm程度に芽出しを揃える。播種を予定していても催芽が不十分な場合には、催芽を十分に行ってから播種する。</p>
(4) 苗箱		
1) 準備		10a 当たり20箱程度準備する。
2) 消毒		前年リゾプス菌が発生した箱は必ず消毒してから使用する。
(5) 播種	適度な灌水を行い、均一に播種する 覆土を均一に行う	<p>(1) 播種量は箱当たり乾粃160g程度とする。</p> <p>(2) 播種前を基本として適度な灌水を行う。 粃の持ち上がりを防止するため粃が露出しないよう適度に覆土する。 覆土後、育苗箱を電熱育苗器あるいは出芽室へ入れる。</p>
(6) 管理	温度管理に特に注意し健苗を育成する	<p>育苗日数は25日程度を目安とする。</p> <p>(1) 播種後、育苗器内の温度を30℃程度（35℃以上はさける）に保ち、2～3日加温し、出芽長が 約1cmに伸びた時点で緑化に移す。</p> <p>(2) 出芽室から緑化に移す場合は、白化防止のため半日程度直射日光にあてないようにする。本葉は1.5葉までは日中25℃、夜間15℃に管理する。 ※白化現象：緑化床に移した直後の幼芽が急に強い光（6万ルクス、6時間以上）に曝されたり、温度が急激に変化（35℃以上または15℃以下）すると葉が白くなること。</p> <p>(3) 本葉1.5葉以後植付けまでは、昼間25℃以上にならないように管理し、通風採光は十分に行う。夜間8℃以下に下がる恐れがある場合は、べたがけ被覆により保温し、ムレ苗の発生防止に努める。 また、床土の乾燥に注意する。</p> <p>(4) 病害虫防除は、県病害虫防除基準を参考に行うこと。</p>
2. 本田の準備	できるだけ深く耕起すると同時に、生わらや土壌改良資材を施用し地力の維持、増強をはかる	<p>前作物はなるべく低刈りとし、残さ量を少なくしておく。耕耘機、トラクターともロータリー耕1回だけとする。耕深は15cm程度を目標とし、耕盤が不整にならないよう留意する。また、生わら施用田、多年生雑草発生田あるいはイネウイルス病流行地帯では秋・冬期に耕起する。</p> <p>生わらや土壌改良材の施用については、土壌診断を活用し、要領は次のとおりとする。</p>

項目	要点	実施内容																																																																									
3. 施肥	他品種より、基肥の窒素を10～20%減じ、必要以上に分げつを発生させない	<p>(1)生わら（切りわら）の施用 地温の低い時期に田植えされる早期栽培では、わらの分解が遅れがちで根が障害をうけやすいので、できるだけ秋期に全量をすきこんでおく。</p> <p>(2)土づくり肥料の施用 冬の農閑期に珪酸資材や含鉄資材を施用し、地力の維持増強をはかる。10a当たり施用量はケイカルでは200kg、電気炉滓では300kgが基準である。</p>																																																																									
		<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">土 壤 条 件</th> <th rowspan="2">成 分</th> <th colspan="4">10a当たり施用量 (kg)</th> </tr> <tr> <th>基肥</th> <th>分げつ期 追 肥</th> <th>穂肥</th> <th>合 計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="3">湿 田 半 湿 田</td> <td>N</td> <td>3～4</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>5～6</td> </tr> <tr> <td>P₂O₅</td> <td>8～10</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>8～10</td> </tr> <tr> <td>K₂O</td> <td>6</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>8</td> </tr> <tr> <td rowspan="6">乾 田</td> <td rowspan="3">沖 積 土 壤</td> <td>N</td> <td>4～5</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>7～8</td> </tr> <tr> <td>P₂O₅</td> <td>8～10</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>8～10</td> </tr> <tr> <td>K₂O</td> <td>5～7</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>8～10</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">洪 積 土 壤</td> <td>N</td> <td>3～4</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>6～7</td> </tr> <tr> <td>P₂O₅</td> <td>8～10</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>8～10</td> </tr> <tr> <td>K₂O</td> <td>5～7</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>8～10</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">漏 水 田</td> <td>N</td> <td>4～5</td> <td>(2)</td> <td>3</td> <td>7～8 (9)～(10)</td> </tr> <tr> <td>P₂O₅</td> <td>8～10</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>8～10</td> </tr> <tr> <td>K₂O</td> <td>5～7</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>8～10</td> </tr> </tbody> </table> <p>(1)漏水田は、葉色を見て分げつ期追肥を施用する。</p> <p>(2)側条施肥の場合は、基肥に速効性肥料を用いるときには基肥量を上記基肥量の2～3割減とする。また、緩効性肥料を用いるときは全量基肥とし、施肥量は上記合計量の2割減とする。</p> <p>※家畜ふん堆肥利用について 水稻は、窒素に対して敏感な作物なので、他の有機質資材よりも窒素含有率の多い家畜ふん堆肥を使用する際には注意が必要。</p> <p>(1)化学肥料を用いて通常の窒素量を施用する場合 10a当たり、牛ふん オガクズ堆肥で1～2t、豚ふんオガクズ堆肥で0.5tとし、連用地など地力の高い圃場では少なくする。</p> <p>(2)化学肥料の代替えとして利用する場合 窒素代替え率が、全窒素施用量に対して、牛ふんで40%以下、豚ふんで70%以下なら可能。</p>	土 壤 条 件	成 分	10a当たり施用量 (kg)				基肥	分げつ期 追 肥	穂肥	合 計	湿 田 半 湿 田	N	3～4	0	2	5～6	P ₂ O ₅	8～10	0	0	8～10	K ₂ O	6	0	2	8	乾 田	沖 積 土 壤	N	4～5	0	3	7～8	P ₂ O ₅	8～10	0	0	8～10	K ₂ O	5～7	0	3	8～10	洪 積 土 壤	N	3～4	0	3	6～7	P ₂ O ₅	8～10	0	0	8～10	K ₂ O	5～7	0	3	8～10	漏 水 田	N	4～5	(2)	3	7～8 (9)～(10)	P ₂ O ₅	8～10	0	0	8～10	K ₂ O	5～7	0
土 壤 条 件	成 分	10a当たり施用量 (kg)																																																																									
		基肥	分げつ期 追 肥	穂肥	合 計																																																																						
湿 田 半 湿 田	N	3～4	0	2	5～6																																																																						
	P ₂ O ₅	8～10	0	0	8～10																																																																						
	K ₂ O	6	0	2	8																																																																						
乾 田	沖 積 土 壤	N	4～5	0	3	7～8																																																																					
		P ₂ O ₅	8～10	0	0	8～10																																																																					
		K ₂ O	5～7	0	3	8～10																																																																					
	洪 積 土 壤	N	3～4	0	3	6～7																																																																					
		P ₂ O ₅	8～10	0	0	8～10																																																																					
		K ₂ O	5～7	0	3	8～10																																																																					
漏 水 田	N	4～5	(2)	3	7～8 (9)～(10)																																																																						
	P ₂ O ₅	8～10	0	0	8～10																																																																						
	K ₂ O	5～7	0	3	8～10																																																																						

項 目	要 点	実 施 内 容						
4. 整地・代かき 5. 移 植 (1) 苗の生育 (2) ほ場条件 (3) 床土水分 (4) 植付株数 (5) 補 植 (6) 病虫害防除	均平に重点をおいて作業する 適期に均一散布する	(1) 田面の均平度が苗の活着や除草剤の効果に影響する。濁水をほ場外に出さないためにも、田面の高いところが見える状態で行い深水では行わない。 (2) 代かきは移植の2～3日前を基準とするが、土性により適宜定める。前作物の残さ、わら、雑草などが多い場合は、浅水でできるだけ埋没するように留意する。 移植に適する苗の大きさは、草丈10～15cm、苗齢2.1～2.5葉である。 (1) 移植時の田面の堅さは作業精度に関係するので、精度高い作業が行える堅さを経験的に会得することが大切である。 (2) 一般的には移植2～3日前に代かき、当日落水。土壤硬度は「さげふり沈下深」（重さ115gの錘を1mの高さから落としたとき土中に入る深さ）で約10cmが目安になる。 育苗箱は乾きすぎや湿りすぎにならないよう床土水分を調整する。 m ² 当たり15～18株（坪当たり50～60株）程度、1株3～5本植を標準とする。 連続2株以上の欠株を生じた場合は、2株に1株の割合で補植する。 箱施用による場合は、定められた期間内に定められた量を育苗箱に均一に散布する。						
6. 除 草		(1) 生育中期までの除草剤使用例は次のとおり。雑草の発生の少ない圃場では一発処理剤の使用も可能である。除草剤の使用においては、処理後7日間は用水の掛流しや落水をしない。 (2) 散布後に多量の雨が予想される場合には、オーバーフローによって効果が低下するので使用しない。砂質土壌や極端な漏水田、極端な浅植、深植や軟弱苗の場合では葉害が発生しやすい。同一成分を含む薬剤の連用はさける。						
<table border="1"> <thead> <tr> <th data-bbox="628 1361 863 1413">対 象 雑 草</th> <th data-bbox="863 1361 1460 1413">除 草 剤 使 用 例</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="628 1413 863 1496"> 一 年 生 雑 草 マ ツ バ イ ウ リ カ ワ ホ タ ル イ ミズ ガ ャ ッ リ </td> <td data-bbox="863 1413 1460 1496"> 初期剤 + 中期剤 (植代時～移植後7日) (移植後16～25日) </td> </tr> <tr> <td data-bbox="628 1496 863 1637"></td> <td data-bbox="863 1496 1460 1637"> 一発処理剤 移植当日～移植後30日まで (剤による) </td> </tr> </tbody> </table>			対 象 雑 草	除 草 剤 使 用 例	一 年 生 雑 草 マ ツ バ イ ウ リ カ ワ ホ タ ル イ ミズ ガ ャ ッ リ	初期剤 + 中期剤 (植代時～移植後7日) (移植後16～25日)		一発処理剤 移植当日～移植後30日まで (剤による)
対 象 雑 草	除 草 剤 使 用 例							
一 年 生 雑 草 マ ツ バ イ ウ リ カ ワ ホ タ ル イ ミズ ガ ャ ッ リ	初期剤 + 中期剤 (植代時～移植後7日) (移植後16～25日)							
	一発処理剤 移植当日～移植後30日まで (剤による)							

項 目	要 点	実 施 内 容
7. 追 肥	<p>良質・良食味米生産を図るため多収目的の過剰追肥は行わない 中間追肥はさける</p> <p>穂肥は出穂期前18日頃に施用する</p>	<p>(1) 3の施肥基準に従って行う。</p> <p>(2) 穂肥窒素量は、湿田～半湿田では10a当たり2kgを標準とし、乾田、漏水田では3kgとする。なお、半湿田等においても、穂肥施用時の葉色が、標準葉植板で3.5程度に退色している場合は、3kg程度に増量する。 同時にはほぼ同量の加里も施用する。</p> <p>(1) 穂肥の施用時期は、出穂期前18日頃（幼穂形成期7日後）で主稈幼穂長1cmを目安とする。それまでに窒素が切れてもこれより早く施さない。</p>
8. 水管理	<p>中干しを励行する 適期落水により登熟向上を図る (早期落水は避ける)</p>	<p>(1) 活着期 田植後活着するまでは、水深3cmより浅くならないように湛水し、葉からの蒸散や風による苗の倒伏を防ぐ。低温時は深水にして保温する（苗は水没させない）。</p> <p>(2) 有効分けつ期 深水は分けつ発生を抑制するので、3cm程度の浅水にし、ときどき田面を露出させ酸素を供給する。有効茎確保後（1株25～28本程度）は間断かんがいを行う。</p> <p>(3) 無効分けつ期（コシヒカリ：田植後40～45日頃、よさ恋美人：35～40日頃） 土壌表面にヒビ割れが見える程度に中干しを行い、茎数を抑える。漏水田では、中干しにより漏水を助長することがあるので、軽めの中干しか間断かんがいにする。</p> <p>(4) 幼穂形成期～穂ばらみ期 中干しの後の灌水は、根に急激な変化を与えないよう、灌水と排水を2～3度繰り返してから湛水する。なお、出穂の約2週間前に低温（水温17℃以下）が予想される場合は深水により幼穂を保護する。</p> <p>(5) 出穂・開花期 湛水管理とする。</p> <p>(6) 登熟期 開花期を過ぎると浅水または間断かんがいとす。コンバイン等の利用から土壌を固めるため早期に落水する傾向があるが、米の品質低下を招くため適期落水を行う。落水の目安は、出穂期後25～28日頃とするが、落水後に晴天が続く土壌が乾燥しすぎる場合は走水により水分を供給する。</p>

項 目	要 点	実 施 内 容
9. 病虫害防除	<p>発生予察情報をもとに適期散布する</p> <p>特にいもち病、紋枯病の発生に留意する</p>	<p>(病 害)</p> <p>(1)いもち病の防除</p> <p>適正な施肥を行い、窒素過多を避ける。発病苗を本田に持ち込まず補植用苗や余り苗を水田やその周辺に放置しない。常発地においては、苗箱処理剤を施用するとともに、葉いもちおよび穂いもちに対し各1回程度薬剤を散布する。</p> <p>※いもち病の繁殖や感染に適する気温は24～26℃であり、稲は30℃未満の低い気温や日照不足により抵抗力が弱まるため、温度条件と降雨が重なるると被害が大きくなる。なお、30℃以上ではいもち病菌の活動は弱まる。</p> <p>※QoI耐性菌が県内でも確認されており、QoI剤の使用は年1回までとする。</p> <p>①葉いもち</p> <p>発生初期を重点に防除する。</p> <p>1)時 期 5月中旬～6月下旬（初発生は5月上旬頃）</p> <p>2)降雨が続く発病が多くなる場合は、晴間に薬剤散布する。</p> <p>②穂いもちの防除</p> <p>穂ばらみ後期（出穂直前）を重点に一斉防除する。</p> <p>第1回 6月中下旬 穂ばらみ後期</p> <p>第2回 7月上中旬 穂揃期</p> <p>(2)紋枯病の防除</p> <p>病勢が上位葉に進展し始める頃（7月上旬）に薬剤を散布する。発病が多いほ場では、これより以前に1回散布しておく。</p> <p>※紋枯病の適温は28～32℃で、気温が高くて株間の湿度が高いときに発生するが、ほ場における初発時はそれより低い温度であり、分けつ期頃の気温が平年より高い時あるいは多肥などで過繁茂になったときに発病は早まり、多発生となりやすい。</p> <p>(3)もみ枯細菌病の防除</p> <p>苗における発病を極力なくし、健全な苗を植え付ける。深植や深水にならないように管理し、排水路を整備して浸冠水を防ぐ。薬剤による防除は、出穂期に効力が発揮できるように出穂期前に散布しておく。</p> <p>※気温が25℃以上で適度の雨が続くような時に発生する。</p> <p>(4)黄化萎縮病</p> <p>本田初期における降雨による浸冠水で感染発病する。</p> <p>①圃場の排水を改善し浸冠水を避け、浸冠水した場合には直ちに排水に努める。</p> <p>②薬剤防除の効果が低く、罹病すれば回復しない。70%以上の株が発病した場合は初期であれば植えかえる。軽い場合は病株だけを抜き取り処分する。</p> <p>※若い稲や分けつ茎の若いうちに感染し、やや低温（20℃以下）で侵害する。</p>

項目	要点	実施内容
	<p data-bbox="339 1373 512 1402">黒点症状米対策</p> <p data-bbox="339 1630 464 1659">斑点米対策</p>	<p data-bbox="635 277 730 306">(虫 害)</p> <p data-bbox="624 320 927 349">(5)イネミズゾウムシの防除</p> <p data-bbox="646 362 1461 517">典型的な本田初期害虫であるので、防除は越冬成虫およびふ化幼虫を対象とする。本田への侵入最盛期（5月中下旬）と移植期の間隔が小さい場合は粒剤の箱施用が有効であるが、移植時期が早く侵入の最盛期との間が長い場合は、成虫の侵入状況を見ながら本田防除を行う。</p> <p data-bbox="646 530 1461 645">被害としては、成虫による葉の食害と幼虫による根部の食害があり、寄生数が多いと株全体が白っぽくなり、生育が著しく損なわれ、ひどい場合は欠株となる。</p> <p data-bbox="624 658 927 687">(6)スクミリンゴガイの防除</p> <p data-bbox="646 701 1461 815">水路に貝が発生しているところでは、取水口・排水口に5mm目の金網を張る。水中で食害するためできるだけ1～2cmの浅水管理を行い、同時に侵入した貝を捕殺する。発生田では密度を下げるため冬期に耕耘を2回ほど行う。</p> <p data-bbox="667 828 1166 857">植え付け後発生が多い場合は薬剤防除を行う。</p> <p data-bbox="624 871 903 900">(7)ニカメイチュウの防除</p> <p data-bbox="646 913 1461 983">発生予察情報に注意し、5月中～下旬に行う。降雨日の多いときは粒剤施用の効果が高い。</p> <p data-bbox="646 996 1461 1111">県での発生は平坦部で年3回、山間部で2回であり、主に稲わらや稲の刈り株において4齢幼虫で越冬する。孵化したての幼虫が食入前に葉面をはいまわるとき、虫体に接触するように薬剤をまいておく。</p> <p data-bbox="624 1124 927 1153">(8)ツマグロヨコバイの防除</p> <p data-bbox="646 1167 1461 1368">出穂後の異常発生が予想される場合のみ防除を行う（6月下旬）。稚苗移植栽培はイネ萎縮病の流行を激化させる傾向があるため、早期栽培地帯では2月下旬までに休閑田を耕起し、ツマグロヨコバイの食草であるスズメノテッポウを除去する。イネ萎縮病は、イネが若いほど感染しやすいので、稚苗を早植した場合はとくに注意し、本田初期防除に努める。</p> <p data-bbox="624 1382 874 1411">(9)アザミウマ類の防除</p> <p data-bbox="646 1424 1461 1494">出穂直前にウンカ・ヨコバイ類などと同時に一斉防除を行う（極早生種との混作地帯では極早生種の出穂直前に第1回目の散布を行う）。</p> <p data-bbox="646 1507 1461 1621">黒点症状米は開花期にアザミウマ類が顎内へ侵入し、加害することによって生じるため、出穂、開花期までの密度低下を図ることが重要である。アザミウマ類の発生盛期は6月下旬～7月上旬である。</p> <p data-bbox="624 1635 863 1664">(10)カメムシ類の防除</p> <p data-bbox="646 1677 1461 1747">斑点米の発生を抑えることを目的に出穂10日後頃とその5～7日後に防除する（病虫害防除指針の使用時期に注意する）。</p> <p data-bbox="646 1760 1461 1915">繁殖、飛来源となる場所の雑草などは出穂14日前までに刈り取るか、耕起し除去する。ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類は堤防や畦畔草地のチガヤ、ススキなどイネ科雑草の株元で越冬するので、春先に越冬場所の管理を行い、環境を整備し、発生密度の低下を図る。</p>

項 目	要 点	実 施 内 容
10. 収 穫	適期刈取りを励行する	<p>(1) 刈取りはコシヒカリは出穂後34～35日、よさ恋美人は出穂後32日を目安とし、一穂の籾の約90%が黄熟した頃を目標にする。</p> <p>(2) 早刈りを避け、また刈り遅れないように注意する。</p> <p>(3) 機械収穫は作業条件や作業方法に注意する。機械収穫上の注意は下記のとおり。</p> <p>①自脱型コンバイン (導入の注意)</p> <p>1日の作業能率を基礎にして1日の作業計画をたて、乾燥機的能力を考慮して定める。</p> <p>また、収穫後生籾を袋詰めのまま長く放置しないようあらかじめ収穫から乾燥の作業体系を組立てておく。</p> <p>(作業条件、使用上の注意)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 露や雨でぬれていると、脱ぶや籾の損傷が多くなるのでこのような時は作業しない。 ・ 作柄の良い稲や、わら、籾の水分が高い早期栽培では、作業速度や刈幅を調整し脱穀部の過剰な負荷を小さくする。 ・ ベルト、チェーン、走行部のクローラー、脱穀部等の主要部が故障すると作業ができなくなる。シーズン前に専門の点検を受けておく。 ・ 突発事故には至らなくても、前述の箇所の修理、交換をしていないと穀粒の損失、損傷が多くなるので、保守を怠らない。 <p>※ そのほかはバインダーの項に準じる。</p> <p>②バインダー (作業条件)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 使用する機種に応じた条間を移植時期に考慮しておく。 ・ 落水後は排水に留意して走行性能が低下しないように田面を固めておく。 ・ 刈取り時期が遅れると、ほ場ロスが多くなることから適期刈取りを励行する。 <p>(作業方法)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 倒伏の少ないときはまわり刈りをするが、倒伏が甚だしいとき(立毛角20～45度)は向い刈りを避ける。 ・ 田面が多湿のときは、結束部に泥がつまらないよう高刈りとする。 ・ 束の大きさは、作期、刈り取り後の作業との関連を考慮して定めるが、地干、架干のときは結束部の乾燥をよくするために小束とする。

項 目	要 点	実 施 内 容
11. 乾燥調整	過乾燥の防止に努める。 乾燥機の適正利用による 胴割れ米の発生防止に努 める	<p>(使用上の注意)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 稲体が露や雨でぬれている、あるいは雑草の多い状態では回転部にまきつきやすくなるので、早めに除去する。 ・ 結束部をぬらすと、ひものくり出しが悪くなり作業能率を低下させる。 ・ 傾斜面や畦越えには、機械先端部の故障を起こさないようにバックで使用する。 ・ 故障は搬送部が最も多く、切断した稲を結束部へ横送りするチェーン、突起ベルトとその軸まわり、次いで結束部と刈取り部のモアールのまわりである。従ってこれらの部分の点検修理を励行する。 <p>(1) 玄米水分は14.5%に仕上げる。</p> <p>(2) 選別をよくする（網目は1.8mm以上を使用する）。</p> <p>(3) 乾燥機の使用上の注意は下記のとおりである。</p> <p>(導入の注意)</p> <p>経営規模や1日の収穫量（収穫期の種類、能率）に見合うものを選ぶ。</p> <p>(使用上の注意)</p> <p>① 経済運転と火災予防の観点から、据え付けに当たっては次の点に留意する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 籾の重みで機械が沈下しないよう平らな場所を選定し、空気の取り入れ口が南側に向くようにする。 ・ 湿った排気が取り入れ口に戻らないようにする。 <p>② 乾燥温度は、大気温度、湿度および乾燥機の種類、張り込み量によってかえる。静置型では、水分18%から仕上げまで35℃とするが、湿度の高い場合は40℃なってもよい。</p> <p>また、循環型では気温+10℃、雨天のときは+15℃を目安に胴割れ防止に留意する。なお、乾減率は時間当たり1%以下とする。</p> <p>③ 乾燥開始、乾燥途中および乾燥終了予定時の籾水分量を水分計により正確に把握し過乾燥を避ける。</p> <p>④ 高水分籾を乾燥する場合には、次の点に注意する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 籾の選別をよくする。 ・ 乾燥開始時の籾水分量のフレ（水ムラ）を測定し、フレが大きい場合には初期の乾減率を落とし、籾水分のムラ直しをしたうえで、本乾燥に移る。

(2) その他品種

耕種基準の大要はコシヒカリに準じる。ここではコシヒカリと異なる点のみ記載した。

項目	要 点	実 施 内 容																																																										
品 種	南国そだち	<ul style="list-style-type: none"> 野菜跡や多肥栽培を避け、高品質米生産に努める。 穂数の確保を図る。 耐倒伏性が不十分であるので、極端な多肥を避け後期の栄養・水管理に留意する。稲体の緑が濃く登熟期間がやや長いので適期刈取りに留意する。また、紋枯病・白葉枯病に弱いので注意する。 																																																										
	ヒデコモチ	<ul style="list-style-type: none"> もち品種では塩水選の比重は1.03（水1ℓに食塩38g）とする。穂発芽性が「易」であるので、倒伏させないよう後期追肥の多用は避ける。ふ先に色がついていないので粳との識別に注意する。 																																																										
施 肥		<p>ヒデコモチ</p> <p>土壌条件の施肥基準は次のとおりとする。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">土 壌 条 件</th> <th rowspan="2">成 分</th> <th colspan="4">10a当たり施用量 (kg)</th> </tr> <tr> <th>基 肥</th> <th>分けつ期 追 肥</th> <th>穂肥</th> <th>合 計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="3">湿 田</td> <td>N</td> <td>6</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>8</td> </tr> <tr> <td>P₂O₅</td> <td>7</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>7</td> </tr> <tr> <td>K₂O</td> <td>6</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>8</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">乾 田</td> <td>N</td> <td>7</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>9</td> </tr> <tr> <td>P₂O₅</td> <td>8</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>8</td> </tr> <tr> <td>K₂O</td> <td>6</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>8</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">漏 水 田</td> <td>N</td> <td>5</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>10</td> </tr> <tr> <td>P₂O₅</td> <td>8</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>8</td> </tr> <tr> <td>K₂O</td> <td>6</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>9</td> </tr> </tbody> </table>	土 壌 条 件	成 分	10a当たり施用量 (kg)				基 肥	分けつ期 追 肥	穂肥	合 計	湿 田	N	6	0	2	8	P ₂ O ₅	7	0	0	7	K ₂ O	6	0	2	8	乾 田	N	7	0	2	9	P ₂ O ₅	8	0	0	8	K ₂ O	6	0	2	8	漏 水 田	N	5	2	3	10	P ₂ O ₅	8	0	0	8	K ₂ O	6	0	3	9
		土 壌 条 件			成 分	10a当たり施用量 (kg)																																																						
基 肥	分けつ期 追 肥		穂肥	合 計																																																								
湿 田	N	6	0	2	8																																																							
	P ₂ O ₅	7	0	0	7																																																							
	K ₂ O	6	0	2	8																																																							
乾 田	N	7	0	2	9																																																							
	P ₂ O ₅	8	0	0	8																																																							
	K ₂ O	6	0	2	8																																																							
漏 水 田	N	5	2	3	10																																																							
	P ₂ O ₅	8	0	0	8																																																							
	K ₂ O	6	0	3	9																																																							
収 穫	適期刈取りを励行する。	<p>穂肥の施用時期は、出穂前25～20日とし、施肥量は品種の耐倒伏性、穂いもち耐病性などを考慮して適宜加減する。ただし、葉色が早くから退色した場合は、出穂後35～30日と出穂後20～18日にN成分で2kgずつ施用する。</p> <p>収穫適期は一穂の籾の90%が黄熟した頃で、気象条件によって異なるが、各品種の目安は以下のとおりである。</p> <p>南国そだち、ヒデコモチ・・・・・・・・・・・・出穂後32日</p>																																																										